

外国語だより

Vol. 9

VOICES FROM THE FOREIGN LANGUAGES SECTION, INSTITUTE FOR LIBERAL ARTS, Vol. 9

目次

教育の質向上サイクル推進助成（EdCycle Grant）を利用した新科目の試み

「学生による自主的外国語授業におけるAIツール、ICT、ポートフォリオの活用による授業の設計」:

2024年度活動報告（2024年4月から12月）

木内 久美子 3

2024年度1Qより、新科目「国際交流実践」を開講

～学内の多文化共生を視野に～

赤羽 早苗 6

学習プログラム紹介

TASTE海外短期語学学習プログラムについて

石原 由貴 8

イベント報告

Lay Confraternities in Early Modern Japanese Workshops

Carla TRONU MONTANÉ 9

活動報告

「思う。」と書かなくても、思いは伝わる

—— 宇佐美寛の思想とライティング・センター ——

小泉 勇人 11

フィールド調査のこぼれ話：コロナ以来4年ぶりにメキシコを訪れて

渡辺 暁 14

研究室から〈新任の挨拶〉

カルラ・トロヌ＝モンタネー先生の自己紹介 /

Self-Introduction by Prof. Carla TRONU MONTANÉ

Carla TRONU MONTANÉ 18



「学生による自主的外国語授業におけるAIツール、ICT、ポートフォリオの活用による授業の設計」：2024年度活動報告 (2024年4月から12月)

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 木内 久美子

2024年4月から東京科学大学の教育の質向上サイクル推進助成（以下、Edサイクル）の助成を受け、「学生による自主的な学びの設計：外国語授業におけるAIツール、ICT、ポートフォリオの活用による授業の設計」（木内久美子、山根亮一、赤羽早苗、小泉勇人、永原健太郎、調麻佐志（いずれもリベラルアーツ研究教育院所属・敬略））が始動した。木内と山根の二名を中心に活動を計画・運営し、赤羽・小泉の二名は英語教育、永原・調は、科学教育や科学倫理の知見の提供という立場から、このプロジェクトに参加している。

Edサイクルの目的は、「教員および組織のもつ教育力を活性化させる教育の質向上に資する新しい取組み、既存の取組みをさらに発展させて質向上を目指す取組み、学内への波及効果が高い教育改善モデルとなる取組みを支援」することである¹。本プロジェクトでは、1年目の主な活動を、教員教育（生成AIツールやICTについての知識のアップデートとデジタル教育におけるリテラシーの底上げ）、2年目の主な活動を授業での学生との対話をととした実践（授業内での生成AIツールやアプリ、ポートフォリオの活用）と、授業内での活用モデルの設計としている。2年目の授業では、学生が自らの学習をデザインしながら、ポートフォリオを通して学習のアウトプットを行うことで、各自のニーズやスケジュールに合わせて、個別にカスタマイズできる自主的な外国語学習の構築モデルを探ることになる。

1年目の活動としては、2024年12月時点で、EDサイクル主催の講演会を3回行った。2024年6月3日（月）には、東北大学名誉教授の岡田毅氏による講演「大学英語教育の理念・目標・方略、そして実践：基礎的な意思統一に向けてのキックオフトーク」を開催した。岡田氏は、国際市場における、日本の大学生の英語力の競争力の低さを統計的に示されたうえで、現在の英語授業に見られる一斉画一的な教育方法から、学習ツールを活用した個別最

適化への脱却を提案された。さらに、学生の英語力の底上げのためには、個別の授業や教員の努力を超えて、組織としての授業改善への取り組みの必要だと説かれた。岡田氏は、東北大学で英語教育の抜本的な改革を牽引された経験と、国内外での大学での英語教育についての豊かな知見をもとに、ツールとして英語運用能力の徹底的な鍛錬が大学の英語教育の急務であるという見解を、ユーモアも交えながら鋭い分析によって示された。この機に、本学の英語教員数名が、岡田氏が理事長を務めるEGAP-Japanの活動にあらたに参画し、英語教育に関する知見をアップデートする貴重な機会を得ている²。

6月5日（水）には、スウェーデン王立工科大学（KTH）のJamie Rinder氏による講演「理工系学生に必要な英語コミュニケーションのための授業：専門英語、留学、海外での就職を見据えて（How can courses in English communication best prepare student engineers for their content courses, international study, and future employment?）」が開催された。KTHでは専門教育の授業はほぼ英語で行われているが、学部学生は、科目によって英語とスウェーデン語の両方でレポートを作成する。英語が堪能だとされるスウェーデン学生であっても、最初から理工系の専門研究で求められる明晰な英文が書けるわけではなく、学生には専門に特化した英語教育が必要である。KTHの英語教員3名は、学生が常に参照できるオンライン・ガイドとして「KTH Guide to Scientific Writing in English」を5年がかりで作成し、授業での活用をととしてさらにアップデートしながら、学生の自主学習の効果をあげている³。



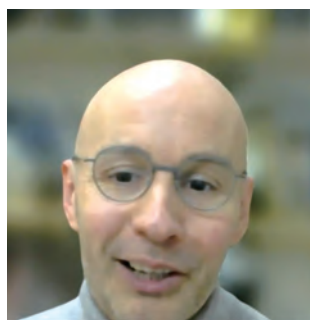
質疑応答中の岡田氏



Rinder氏講演会

Rinder氏は、今日の英語教育がたんなる英語の運用ではなく、専門分野を異にする専門家との交流を促進するテクニカル・コミュニケーション能力の鍛錬にも目を向けるべきであると主張し、KTH ではテストスコアよりも実践での言語運用能力の向上を評価する学修体制をとっていることを説明された。さらに講義では授業現場で使える活動事例も共有された⁴。

12月3日(火)には、ケンブリッジ大学工学部教授、フランス語教員で、言語コミュニケーションセンター (CLIC: Centre for Languages and Inter-Communication) のセンター長でもおられる David Tual氏をゲスト講師にお招きした。Tual



Tual氏

氏はKTHのRinder氏とともに、ヨーロッパの理工系大学での外国語教育における協働を促進するThe Global Engineers Languages and Skills (GELS) ネットワークを主宰・運営している⁵。「言語学習と言語教育をリブートする (Rebooting Language Learning and Teaching)」と題された講演は、参加者のチャットを交えながら、インタラクティブな形で行われた。Tual氏はポートフォリオの活用によって、学生が自らの学習の設計にたいしより大きな自由と責任を与えられ、教員は学生に個別にサポートするという個別化の発想に基づく、時代に合った新たな外国語教育の形を生み出せると力説された。Tual氏のご自身の授業設計や学生の提出成果物など、具体例をあげながら、ポートフォリオを設計させる際の具体的な注意事項や、授業の評価方法などを参加者と共有してくださった。

いずれの講演会もハイブリッド、あるいはオンラインで行われ、学内から広くの参加者を募った。参加者はリベラルアーツの教員を中心に、平均で15名以上であり、本プロジェクトへの高い関心がうかがえる。ハイブリッド・イベントではオンライン参加が対面参加を上回り、オンライン参加の利便性がうかがえる。1月以降も、生成系AIツールやポートフォリオについての講演会を開催する予定である。

2025年の第1クォーターには、英語の選択科目「英語学習法」を設置し、山根と木内が共同で担当する。1年目で得られた知見を、教室で実践し、学生の振り返りをより効果的なAIツールやポートフォリオの活用の改善に生かし、教室内での活用マニュアル作成を進めることになる。

また、本EDサイクルとのタイアップとして、二つのイベントを開催したことも付記しておきたい。ひとつはコロナ禍で木内が自主的に行っていた「コロナ時代の外国語教育」研究会(2022年に三ツ堀広一郎教授、渡辺曉准教授を迎えて2回のオンライン講演会+談話会を開催)を、「コ

ロナ時代後の外国語教育」研究会として名を改めたうえで、2024年4月25日に小泉勇人准教授から映画を用いた英語授業の実践事例をご紹介いただいた。英語を学びながら映像リテラシーや、批評の書き方も学べるという、大変に魅力的な授業内容が強く印象に残った。

もうひとつのイベントは、6月21日に東京科学大学(旧東京工業大学)で行われたJ-GELSのハイブリッド形式のネットワーク・イベントである。J-GELSとはGELSネットワークのサブ組織で、GELSネットワークに所属する全世界の理工系大学の日本語教員と、日本を拠点に活動する外国語教員からなるネットワークだ。KTHの日本語教員の調垂紀子氏とフランスのセントラル・リール大学の日本語教員の杉江文美子氏が軸となって、オンラインで定期的に勉強会を行っている。東京科学大学でのネットワーク・イベントは、日本を拠点に活動する教員三名(東京科学大学・佐藤礼子教授、東京大学・古市由美子教授、木内)が中心となり、さらに研究滞在で来日していたKTHのRinder氏のお力添えで実現した。日本語セクションの留学生ラウンジをお借りし、日本語セクションの先生数名が会場設営や機材管理を行ってくださった。この場を借りて、あらためてお礼を申し上げたい。本ワークショップには、東京科学大学のみならず、東京大学、京都大学、九州大学、東京農工大学から対面で16名、オンライン参加も加えると23名の日本語教員と英語教員が参加し、教室内外でのICTツールや、生成AIツールの使用、日本語教育における言語運用能力の指標の開発、理工系の留学生が大学で直面する日本語運用の課題などについて、教員が広く情報交換をする場を設けることができ、本EDサイクル・プロジェクトにとっても大変有意義な学びの場となった。



J-GELSイベント後

¹ EDサイクルに関するサイト:

<https://www.citl.titech.ac.jp/edcycle2024/>



² EGAP-Japan のサイト：

[https://www.toefl-ibt.jp/educators/institutions/
egapjapan/info/](https://www.toefl-ibt.jp/educators/institutions/egapjapan/info/)



³ KTH の理工系学生向けのオンライン・ガイド：

[https://www.kth.se/en/larande/sprak/utbildning/
sprak/eng/writing-guide](https://www.kth.se/en/larande/sprak/utbildning/sprak/eng/writing-guide)



⁴ Badgeプロジェクト：

<https://www.thebadgeproject.eu/>



⁵ GELSネットワーク：

<https://www.clic.eng.cam.ac.uk/news/GELS>



2025 年度 1Q より、新科目「国際交流実践」を開講 ～学内の多文化共生を視野に～

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 赤羽 早苗

はじめに：「国際交流実践」科目を新設

2025 年度の第1クォーターにリベラルアーツ研究教育院の英語選択科目として、「国際交流実践」を新設します。今回は、外国語だよりでそのお知らせと、科目新設に至る背景を共有させていただければと思います。

教員としての想い

「国際交流実践」は、現行の GSEP (Global Scientists and Engineers Program) 学生向けの立志プロジェクトに、日本人学生の参加を可能にする科目です。GSEP とは旧東京工業大学で 2016 年から開始された、英語のみで学士課程を修了できるプログラムで、毎年 11 ～ 18 名ほどの学生が大岡山での新生活を開始します。私は 2021 年 4 月に旧東工大に着任しましたが、その当初から担当教員の皆さんと一緒に、GSEP 学生が履修する「東工大立志プロジェクト」(英語開講)を担当してきました。毎年多様な講演者の方々が来校し、講義をしてくださっています。

私自身、長年米国で留学生として生活していた背景もあり、GSEP 学生には強い思い入れがあります。学士課程を英語のみで修了するプログラムへの入学当初は、日本語スキルを持たない学生が大多数で、「日本に来て間もない学生が、入学直後の第1クォーターに、学内で孤立しているのではないか」と、毎年陰ながら心配な気持ちでいました。特に 2021 ～ 2022 年度はコロナ禍でオンライン開講だったため、それぞれの国からの時差を考慮しながらの授業開講で、心配は尽きませんでしたが、未曾有の状況下でも GSEP 教員の皆さんの素晴らしいチームワークとご尽力のおかげで、多くの学生が「楽しい学生生活を送っている」と、私にも話してくれました。

そんな GSEP 学生ですが、留学当初に日本人学生と交流する機会がもっと存在したら…と共有する学生が多いことも事実です。特に初年次教育を受ける 1 年目には、英語科目を含む必修科目で、常に GSEP のクラスメートと英語開講科目を履修している状況において、授業において GSEP 外のネットワーク構築が困難なのではと推察しています。その一方で、英語科目を履修する日本人学生からは、「学内には留学生が多いので交流したいが、機会がないので知り合いになれない」などのコメントが頻繁に共有

されます。一教員としてこれらの要望を叶えるべく、何とか GSEP 学生と日本人学生が、同じ教室で交流しながら協働し相互学修の機会を作り出せないか…と、年々強く感じるようになりました。

EdCycle Grant の取組み

そこで 2024 年度 4 月から、本学教育本部で実施している教育の質向上サイクル推進助成 (EdCycle Grant) を活用し 2 年間の計画で、「立志プロジェクトにおける GSEP 学生と日本人学生の交流」という取組みを実施しております。その名の通り、GSEP 学生専用で英語開講の立志プロジェクトに日本人学生にも参加してもらい、GSEP 学生に 1 年生の第 1 クォーターの授業内で、日本人学生と交流・意見交換を通して協働の場を提供することが主な目的です。今年度は、実験的に 6 名の日本人学生に TA として講義回と振り返り (グループ・ディスカッション) 回の両方に参加していただきました。初回は多少の遠慮も見受けられたものの、毎週のグループディスカッションは盛況で、時間が足りないほどでした。

クォーター終了後、2024 年入学の GSEP 学生 5 名と日本人 TA 5 名にインタビューを実施し、貴重な体験談を共有していただきました。GSEP 学生からは、“I miss the Visionary Project (立志プロジェクト) class so much. It was a great opportunity to gain different perspectives from each other. We, the GSEP students, take classes together, live in the same dorm, eat together, and commute together, so we were rarely in a same space with Japanese students, especially in the first quarter. But having the Japanese TAs in class gave us an opportunity to interact with Japanese students for the first time.” や、“I learned diverse perspectives from our discussions that are different from the South East Asian or South Asian point of views.” など、日本に到着して間もない頃に体験した、日本人学生との交流・協働の機会と、互いに持つ多様な視点を共有できたことが、非常に強く印象に残っているようでした。

また日本人 TA も、授業での留学生との協働を有益に感じたようです。「日本人の自分の意見を興味深く聞いてくれ、面白い視点だと言ってくれたことが嬉しかった。同じア

アジア圏からの同年代の学生でも、違う視点を持っていることに気づけたのが良かった」、「日本にいなながらも留学できたような、とてもいい機会だった。英語でのディスカッションは困難な時もあったが、十分な準備をして授業に参加すれば、自分にもできると実感し、自信となった。こんな授業が増えてほしい」などの感想が出ており、留学生との英語での協働体験の影響の強さを噛み締めていました。これらの事例からも、大学教育における留学生と日本人学生との授業時間内の協働体験が、学内の異文化への理解や多文化共生への第一歩になるのではと考えました。

上記のような背景の中で、英語教室のご協力のもと、新英語科目「国際交流実践」を第1クォーターの月曜5-6限・木曜3-4限に2単位科目として開講することになりました。GSEP 立志プロジェクトに参加し、課題や毎週のグループワークへの参加、英語での書評執筆、期末のプレゼンテーションを実施することが評価対象となります。主に英語スピーキング力が中級以上の学生で、特に留学を視野に入れている、もしくは既に留学の計画を立てている方に向いていると考えています。現時点では履修者数制限（最大15名程度）はあるものの、これから、文化・国際交流や異文化理解、多文化共生に関心を持つ、多くの学生の皆さんに履修していただければ幸いです。

おわりに：「国際交流実践」から、 さらなる相互理解の促進へと繋げたい

今回の EdCycle による取組みは、教員側にも多大な影響を与えてくれ、特に本学における留学生の日常生活について再検討する良いきっかけとなりました。DEI (Diversity, Equity, and Inclusion、または多様性・公平性・包括性) についての講義後に、「多文化共生が謳われているが、equity を考慮しない共生が可能なのか」、「例えば、もし授業中に被災したら、留学生が必要な支援を提供することができるのだろうか。それは、equity に関する課題でもあり、inclusion に関する課題でもある。留学生数を増やすなど、diversity に取り組むこと同時に、equity や inclusion も検討しなくては、共生に繋がらない」と、それぞれ出身国が異なる教員間で議論が始まりました。これがきっかけとなり、融合理工学系所属で GSEP 担当の Choi Sunkyoung 先生と、リベラルアーツ研究教育院の日本語セクション所属で、GSEP 学生向け日本語科目も担当されている榎原実香先生と共に、学内の多文化共生に関するプロジェクトを開始しました。留学生・日本人学生とのさらなる相互理解を深める場を作り、両者が協働し合える機会や環境作りやより良い方法を模索するため、学生・教職員を対象に調査しています。

また、学内での調査だけでなく、行政や地方自治体にも出向きヒアリングを実施しながら、特に留学生の防災・災害時のニーズをどのように包括していけるか検討したいと考えています。これからも本プロジェクトに関心をお持ちの

方々と協働し、学内の風土醸成に貢献できればと思います。今後は学生の皆さんにも「国際交流実践」科目を通して、日本にいなながらも異なる文化や価値観に触れる機会を増やし、多文化共生に必須要素である、多様なニーズへの相互理解の促進へと繋げていただければ幸いです。

TASTE 海外短期語学学習プログラムについて

リベラルアーツ研究教育院

教授 石原 由貴

学生にはできるだけ海外へ出て世界の広さを体感してほしい、という思いから、本学ではさまざまな留学プログラムを提供しています。TASTE 海外短期語学学習プログラムもそのひとつです。これは、本学と協定を結んでいる大学等の実施する4週間前後の語学学習プログラムに参加する学生を支援し、単位を付与する制度です。本格的な留学をする前に語学力を高めておきたい、あるいは、社会に出る前に短期間でもいいので留学を経験したい、という学生のニーズに応えるプログラムとなっています。

今年度は

〔英語〕 ワシントン大学（米）、カリフォルニア大学デービス校（米）、カリフォルニア大学バークレー校（米）、プリティッシュ・コロンビア大学（加）、ウォータールー大学（加）、クィーンズランド大学（豪）、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（英）

〔ドイツ語〕 ベルリン工科大学、ハノーバー大学

〔フランス語〕 レンヌ第二大学

〔中国語〕 国立台湾大学

において夏期休暇中および春期休暇中に行われる学習プログラムを対象としています。学生の自主性を重んじるために、留学先のプログラムの応募、ビザや航空券の手配、寮やホームステイ先の確保などの留学準備は学生自身に行ってもらいます。さまざまな留学プログラムの中から自分にあったものを選び、自分の学ぼうとする言語で留学先とやりとりをすることから実践的な学びが始まります。困ったことや不明な点があれば、留学情報館にいる留学コンシェルジュのサポートが得られますし、オリエンテーションもあります。出発前の語学学習に関しては、外国語学修相談室で相談に応じており、英語スピーキング演習や TOEFL 対策セミナーのような留学に役立つ選択科目も提供しています。これまでに参加した先輩たちからも、準備や心構えに関する情報が得られます。また条件を満たせば奨学金も受けられます。

コロナ禍での一時中断を経て、落ち込んでいた参加者数が戻ってきています。今年度の夏休みには、学士課程1年生2名、2年生5名、3年生9名、修士課程1年生1名、2年生7名の計24名が英語の、学士課程4年生1名がドイツ語のプログラムに参加しました。残念ながら、最近は円安や航空運賃の高騰により参加費用が上がっているのですが、それでも挑戦してくれる学生がいることを心強く思います。

帰国後、参加学生はレポートを提出します。それが現地

プログラムでの成績とともに評価され、英語海外研修、実践型科学技術英語海外研修、第二外国語海外研修などの単位が付与されます。この単位は、2013年度から本学で運営しているグローバル理工人育成コースおよびそれが再編され本年度から新たな形で始まったアントレプレナーシップ教育・グローバル教育オプション（GEO）の修了要件の一部として認定されます。

英語を担当している私は、毎回、帰国した学生の提出するレポートを読むのを楽しみにしています。彼らが短期間に大きな成長を遂げたことがわかるからです。人に何かを頼んだり聞いたりするのが苦手だったのに、海外で困った時に現地の人に親身になって相談にのってもらったことを機に、今度は自分から困っている人に声をかけよう、と思うようになった学生。現地の大学のクラブ活動に自ら頼んで参加させてもらって友人を作り、その友人が日本に来た時に案内した学生。日本以外での暮らしを知ることによって文化や意見の違いに寛容になるとともに、日本のことを客観的に見ることができるようになった学生。自ら手を挙げて修了式でスピーチを行った学生。将来は海外で仕事をしたいと思うようになった学生…。

本プログラムの主な目的は語学学習です。外国語を毎日使う環境に身を置くことで、学生は臆せずに話す自信を得、もっと語学力を伸ばして自由に意思疎通をしたいと思うようになります。ですが、本プログラムで得られるのはそれだけではありません。学生は積極性や柔軟さを身につけ、見違えるようにたくましくなって帰ってきます。実は語学以外の面での成長の方が大きいかもしれません。百聞は一見にしかず。自らの殻を破り、世界への第一歩を踏み出す参加者が増えることを願ってやみません。なお、来年度以降、医歯学系の学生も本プログラムに参加できるよう検討を進めていることを申し添えます。

Lay Confraternities in Early Modern Japan Workshops

Foreign Languages Section, Institute of Liberal Arts

Associate Professor Carla TRONU MONTANÉ

In the 2024 Fall semester I organized three workshops in connection to my research project 'Laity in the Early Modern Japanese Mission: Confraternities and Missionary Rivalry' (KAKEN 20K13157 2020-2024). It was the first event that I organized at Tokyo Science, so it was a very good opportunity to meet new scholars and reconnect with colleagues in the field of Kirishitan Studies based in the Kanto region.

WORKSHOP ①

Limits of the Misericórdia in Japan

Friday 25 October 2024 15:30-17:30h

Dr. Rômulo da Silva Ehalt, Max Planck Institute for Legal History and Theory

WORKSHOP ②

Women and Confraternities

Friday 29 November 2024 15:30-17:30h

Prof. Haruko Nawata Ward, Columbia Theological Seminary

WORKSHOP ③

Indulgences and Confraternities

Friday 24 January 24 2025 15:30-17:30h

Prof. Emi Kishimoto, Osaka University

Prof. Yoshimi Orie, Keio University

Dr. Carla Tronu Montane, Institute of Science Tokyo

The first workshop was a face-to-face discussion session about a book chapter recently published by Dr Ehalt about Misericordia brotherhoods in Japan, which had been circulated in advance. After a brief introduction by the speaker on the reasons for writing it and the problems he perceives in the study of confraternities in the field of Portuguese Imperial History, participants had a very lively and fruitful discussion.

In the second session, Prof Nawata Ward gave a very generous and extensive lecture bringing together an impressive array of historical data: primary sources' quotes and images related to

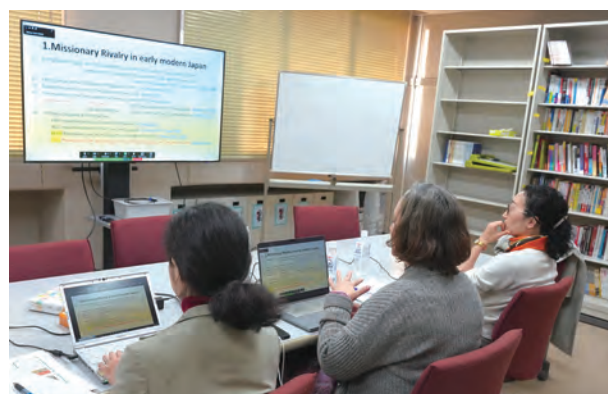
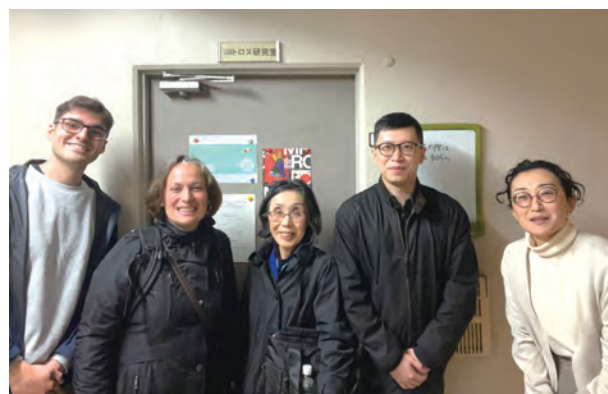
rules, types of confraternities. She also introduced seven Japanese women who were involved in a way or another with the Japanese confraternities, as foundresses or active members of the female branches of the main confraternities, and all participants had a chance to make questions or comments.

In the third session, Prof Kishimoto introduced two prints connected to the indulgences granted to the Confraternity of the Rosary, which have been recently identified at the Library of Studies and Heritage of Toulouse (France). She also introduced some of the teachings on indulgences in several *Kirishitanban* and manuscripts. After that, I contextualized the prints within the missionary dispute between the Jesuits and the mendicants in Japan and presented a preliminary analysis of the print in Spanish. Then, Prof Orie, as the commentator, made some final remarks on the relevance of these documents from the point of view of history of thought and opened the discussion to the floor.

I found specially inspiring the fact that in each session 'new' categories or typologies for Japanese confraternities were presented. While Dr Ehalt's main argument was that Japanese misericordias substantially differed from other misericordias across the territories under Portuguese influence, he also classified Japanese misericordias according to their size, differentiating between small misericordias (mainly with four members who took care of the community in the absence of priests) and large misericordias (with 50 members or more who carried out social work in cities like Yamaguchi, Funai or Nagasaki). Prof. Nawata Ward, after bringing attention on how previous scholarship had identified gender inclusive and gender segregated confraternities, suggested a distinction between two different kinds of confraternities, depending on the focus on either spiritual or physical 'deeds of mercy'. On my part, I brought attention to the existence of a specific kind of confraternities

which supported specific churches economically in Nagasaki, and proposed a distinction between confraternities with or without indulgences. This variety of approaches to categorization, far from a disagreement, is proof that this is a complex topic and that there is still a lot to say about Christian confraternities in early modern Japan.

All sessions took place in the Meeting Room 812 of the West Building 3 (8th Floor) of the Institute of Science Tokyo Ookayama Campus. The first workshop was only presential, but the second and third sessions were hybrid events, with participants from Japan and abroad. We made the most of this post-pandemic era, in which we can enjoy the warmth and agility of presential meetings again, while being able to include via Zoom participants who cannot come to the campus. We are very grateful to the staff of the Foreign Languages Section, Ms Kondo and Mr Otake, for their unvaluable help regarding logistics and technicalities, to our colleagues in Europe, who participated in our events early in their morning, as well as to the academics and the postgraduate students who came to our campus. It is a pleasure to bring together such a diverse community of scholars, including senior as well as young researchers of different nationalities, ethnicity, and gender. These workshops, by providing a space to exchange ideas in English, are a small contribution to the internationalization of Japanese scholarship on *Kirishitan* Studies. In gratefulness, I am looking forward to further opportunities to continue our dialogue and strengthen our network.



「思う。」と書かなくても、思いは伝わる —— 宇佐美寛の思想とライティング・センター ——

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 小泉 勇人

はじめに

2024年10月の第三クォーターより、「東京工業大学ライティング・センター」は「東京科学大学ライティング・センター」として新たな門出を迎えた。Ed-Cycleからの支援を存分に使用し、意気盛んなチューターと共に東京科学大学でのセッション（文章相談）を継続している。オンラインでの対応も継続しており、特にキャンパスが離れている旧・東京医科歯科大学所属の学生からの予約も増えてきた。

加えてセンターでは、日々提供しているセッションに加え、チューターによるワークショップも定期的で開催している。その第二回として、6月26日には「東工大生と医科歯科大生のための文章作成ワークショップ」と題したイベントを実施した。学術的文章技術のレクチャー（パラグラフ・ライティング）、セッションの様子を臨場感をもって伝えるデモンストレーション（チューターの質問から学ぶ文章改善のポイント）、そして参加者を交えてのセッションと、盛りだくさんの内容であった。さらに、11月下旬にこの文章を書いている頃、筆者はチューターたちと共に次の企画に取り組んでいる。12月13日には、新たな学術的文章技術ワークショップが開催されているであろう。

センターの運営および教育に関しては比較的安定した方向性を維持できており、センター内でのトレーニングも深化している。それは、筆者が運営に関わっている文系教養科目である「教養卒論」、大学院授業「ピアレビュー実践」でも同様である。自らの中で咀嚼し実践してきた学術的文章技術、そしてそれを文章相談に活かすピアレビュー技術を繰り返し伝授できるのは教員として幸運である。とはいえ、受講生が書く文章の傾向は流動的である。強調する点は毎年、授業ごとに柔軟に変えており、教育に対する興味は尽きない。

そうした中、最近つとに気にかかる文章傾向がある。それは、「思う。」で締めくくっている文である。学術的文章を実践するにあたり、パラグラフ、構成、引用といった要素に目を配る必要はあるが、ここはひとつ「思う。」の問題を取り上げてみたい。たった一文に対してもピアレビューは効果を発揮するが、それは結果的に、文の集合体である〈文章〉にも大いに影響する。文末における「思う。」の修正は、いかにしてパラグラフ全体に影響するのか。文章作成における最小の単位である〈文〉の書き方に、今一度こだわってみよう。

思いを追放し、中身を書く

例えば次のようなパラグラフがある。内容ではなく、書き方の例として挙げる。

戦争は、国民の日常生活をも組織化していった。政府は、衝動買いによって生活必需品が不足し物価が上昇する

ことをさけるために、一九四〇年一月に食糧と燃料の配給制度を導入した。国民ひとりひとりに配給手帳が配布され、乳児にはミルク、ビタミン計画では子どもに濃縮のオレンジ・ジュースや肝油などが配給された。いわば、国家が国民の体を統制することに着手したのである。（長谷川、2019、pp.26-27、下線は筆者）



短いながら、簡潔かつ情報量の多い、緻密な文を積み重ねたパラグラフである。第一文がパラグラフ全体の意見を伝え、第二、三文が具体的な説明を加え、第四文（最終文）でもう一度意見をまとめなおしている。引き締まり、緊密な文章だ。

ここでもし仮に、第一文が「していったのだと思う。」で締めくくられていたらどうだろう。加えて、第四文が「着手したのだと思う。」などと書かれていたらどうだろう。とたんにこのパラグラフの緊密性はほどけ、読み手と書き手が暗黙の裡に共有していた緊張感が立ち消えてしまわないだろうか。それは、書き手の迷い、確証の無さ、自信のなさを読み手に直感的に伝わるからだ。「思う。」は意外と、足枷になる。

「思う。」や「感じた。」で文末を締めくくる学生の書き手は多い。「思ったり感じたりしたことを書きたかったから」と素朴に考えた結果かもしれない。主張を言い切るだけの確証が持てなかったからかもしれない。それにしても、思い過ぎたり感じたりしすぎではないか？いや正確には、思ったり感じたりするのは自由なのだけれど、それを過剰に伝えてしまう傾向は問題である。書き手によっては、「... と思いました。... と思いました。... のように感じました。」と何度も繰り返す場合も珍しくない。

言語哲学者である宇佐美寛は『作文の論理 [わかる文章] の仕組み』（東信堂、2008）において、「さっさと、思った中身だけを言えばいいのである。」と喝破した

(p.56)。「人間を追放せよ」という衝撃的な題を付した第六章において、宇佐美は明確に、思う内容のみを語るべきだと強く主張する。

算数・数学の答えは「……です。」(「……である。)」という断定の言い切り方である。もちろん、この答えは生身の学習者の思い・考えである。(コンピュータの表示ではない。)しかし、算数・数学に限らず、いかなる答えであっても、回答者は頭で考えているのだから、思い・考えである。それだからこそ、「……と思います。」などと頭の働きを言ってはならない。〈思う〉という事実は除いて、思う内容だけを語るべきなのである。もし、「思う」「考える」「思われる」「と言える」の類の(頭の中身ではなく)頭の働きの語、つまり心理語を付けると、混乱が生ずる。(宇佐美、2008、pp.59-60)

なるほど、「思う」は心理語に属し、それを使えば節が一つ増え余計な手間が増えるというわけだ。手間を省き、簡単な断定の文を書く。そのような構えが、多くの文章には欠けている。再び宇佐美は、「生身の書き手本人が、どう思っている、思いの中身だけを『〇〇は……である。』『〇〇は……する。』という簡単な断定の文で書くように努めるべきである。(論理的な言い方をすれば、〈命題を書く〉のである。)」(宇佐美、60)と強く説く。英語で言えば、I think that SV から I think that を取り除く発想である。英語にしても日本語にしても助動詞があるのだから、遠慮なく「に違いない (must)」「はずである (should)」と言い切る道もあるだろう。混乱を避け、明快かつ緻密な文を書くよう、宇佐美の思想は書き手を誘う。

ピアレビューへの応用

「思う。」の排除にまつわる助言は、学術的文章の指導において役に立つ。なぜかといえば、文末を言い切るからには、書き手は〈自動的に〉言葉を尽くそうとするからだ。書き手が文末を「思う。」「感じた。」などと締めくくるのは、今一つ自分の意見に確証が持ていない可能性がある。書き手自身が中途半端な説明をしていると自覚しており、そういった心理がうっかり文末表現に滲み出る。だからライティング・センターで文章診断をしている際、チューターは「思います。」という書き手が残した〈痕跡〉に注目する。文末における痕跡は、書き手の自信の揺らぎを教えてくれるチェック項目なのだ。例えば次のパラグラフである。

A.1594 年、ロンドン市民は『タイタス・アンドロニカス』という芝居に熱狂していたのだと思う。そのあまりに暴力的な芝居を書いたのは若干 29 歳のウィリアム・シェイクスピアだった。バーミンガムはストラットフォード・アポン・エイボンにて生まれ育ち、大都会ロンドンにふらりとやってきた青年は次々と刺激的な芝居を生

み出しヒットを飛ばしていく。『タイタス』は特に大衆に受けたのだと思う。本作には、のちのシェイクスピア劇を想起させるようなキャラクター達が登場するため、観客を刺激するヒットの要因が既に内蔵されていたのだらう。

一言で言えば、ふわふわとした議論でしかない、どうにも腰の引けたパラグラフである。何を根拠にシェイクスピアの芝居『タイタス・アンドロニカス』が観客に「受けた」などと言えるのだろうか? 「のちのシェイクスピア劇を想起させるような」と言われても、どの劇に登場するどのキャラクターを参照してそう言っているのかさっぱり分からない。根拠を書き損ねた、だらしないパラグラフである。トピック・センテンスを第一文に書いたつもりになっていても、確証が持てないから「思う。」と書いてしまう。以上の点に注意を払い、これを書き直す。

B.1594 年、ロンドン市民は『タイタス・アンドロニカス』という芝居に熱狂していた。そのあまりに暴力的な芝居を書いたのは 29 歳の若者だった。バーミンガムはストラットフォード・アポン・エイボンにて生まれ育ち、大都会ロンドンにふらりとやってきた青年は次々と刺激的な芝居を生み出しヒットを飛ばしていく。『タイタス』は特に大衆に受けた。①劇場で販売されていた台本の簡易版(四つ折り版)が 1594、1600、1611 年と版を重ねている点からも、そのスペクタクル性が長年ロンドンの観客を楽しませていた状況が窺い知れる(Foakes 56)。②そして何より、『タイタス』にはその後の四大悲劇を予感させるプロットやキャラクターの原型が見て取れる。『オセロー』の策士イアゴ、『マクベス』の恐妻レディ・マクベス、『コリオレイナス』の軍人コリオレイナスを既に先取りしたような複雑で濃厚なキャラクターもしっかり登場する。つまり、観客を刺激するヒットの要因が既に内蔵されていたというわけだ。

文章診断において、優れたチューターは A を読んだ瞬間、B でいうところの①と②が欠けていると見抜く。そして A の文章に対し、柔らかく、穏やかに尋ねる——「大衆に『受けた』とありますね、これは、どのような資料や見解があってそう思われているのでしょうか?」、「なるほど一人の劇作家の複数の作品に、性質の共通したキャラクターが登場しているわけですね、興味深いです。ちなみに、どんな作品の、どんなキャラクターを思い浮かべているのですか?」、「(書き手の説明を存分に聴いて、メモも取りつつ) …なるほど、今の説明もまた興味深いですね、また、ここで伝えたいこともよくわかりました。今、説明してくれたことを、このパラグラフに書き加えてみるのはどうでしょう?」。そして、〈とどめの一撃〉を加えれば良い——「これだけ根拠を充実させられるパラグラフですから、せっかくのトピック・センテンス

を『思う。』で締めくくるのはもったいないかもしれませんね？『熱狂していた』と言い切ってしまうのも良いのでは？どう思いますか。」

「思う。」を排除し、断言するからには、言葉を尽くして説明する義務が書き手に生じる。この心理をピアレビューに応用したのが上記の質問例である。

追悼・宇佐美寛

「思う。」の排除、というソリッドな発想に出会ったのは大学院時代、上にも引用した宇佐美寛先生の『作文の論理 [わかる文章] の仕組み』であった。学術的文章技術、およびピアレビューの技術を、筆者は早稲田ライティング・センター創業者である佐渡島紗織先生より伝授いただいた。宇佐美先生は、佐渡島先生の師であった。つまり筆者にとっては大師匠にあたる。その宇佐美先生が昨年、鬼籍に入られた。

宇佐美先生には一度だけお会いした。苛烈な教育姿勢の中に、時折垣間見えるユーモアを見た気がした。何重にも複雑に自身を、世界を、言葉を考え抜く人に違いないと思った（たった一度の出会いで大師匠を評する不肖の弟子としての浅はかさに確信があるから、ここは「思った。」と締めくくるのがむしろ適切である。宇佐美先生に「思いを書くな、中身を書け」と言われてもここは譲れない）。一文一義も（「500 円玉を稼ぐように短い文を積み重ねろ」）、直接引用の大切さも（「引用無きところ印象はびこる」）、「思い。」の排除による強く緻密な文の書き方も、宇佐美先生の著作から、もしくは佐渡島先生を通じて教わった。実は、今回の文章では全体として、全体として「宇佐美的な文章」を目指した。だから、読者に対してやや強い響きで、時に挑みかかる様な文体となった。と、思う。しかし、古典としての宇佐美の教えを現代に継承する筆者の営みがどれほど上手くいっているかに、さほど自信はない（なお、宇佐美の教えに「ないは使わない」というものもある）。それでも試みる。短い文を書き続け、思考を積み重ねる。「思う。」を排除できるくらい、根拠を詰め、自信をもって文を書くのだ。

なお先日「ピアレビュー実践」にて、「思う。」の排除について講義をしたところ、受講生から「新鮮な発想が目が点になった」という反応が少なからず返って来た。宇佐美の思想を、今後も現場に卸していきたい。

最後に

ライティング・センターについて書くというコンセプトであったものの、その現状とイベントの紹介をしている内に途中から文章論へと移行し、そして宇佐美先生の話へと集約されるという、いつになく不思議な構成の文章になってしまいました。とはいえ、少しでもライティング・センター、および文章指導の発想が伝わったのであれば幸いです。最後に、お忙しい中にも関わらず貴重な時間を割いてセンター運営をサポートしてくださっている外国語セクション事務の河瀬

祐佳さん、中込崇さん、鷺沢知美さんに御礼申し上げます。そして、東京科学大生の文章力向上を目指して尽力しているチューターひとりひとりに感謝を伝えます。東京科学大学ライティング・センターにおいて物を書く営みへの参画がこれからも続くよう、ディレクターとして仕事を続けて参ります。

注：文章例 A. B. は、2024 年 12 月 1 日に筆者が文学フリーマーケットに出品した評論『怨嗟と復讐は人肉パイの中で煮えたぎる—『タイタス・アンドロニカス』入門—』（p.5）からの段落に変更を加えたものである。

参考文献

宇佐美寛『作文の論理 [わかる文章] の仕組み』改訂版、初版 1998 年、東信堂、2008 年。
長谷川貴彦『イギリス現代史』岩波新書、2019 年。

フィールド調査のこぼれ話： コロナ以来4年ぶりにメキシコを訪れて¹

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 渡辺 暁

はじめに

2019年の年末を調査地のメキシコで過ごした私たち家族は、2020年1月1日、メキシコシティの空港で新年を迎えた。未明のフライトに乗るために空港のゲートの前で登場を待っていると、どこからともなく、¡Feliz año nuevo! (Happy new year!) という声が聞こえてきて、たまたま居合わせた人々が新年を喜び合ったのだった。まさかその直後にパンデミアによって世界中の移動が制限されるようになるとは、もしかしたら一部の専門家はそのときすでに予測していたかもしれないが、世界中のほとんどの人は思わなかっただろう。少なくとも私たちは、次の渡航にするとしまでに4年1ヶ月と13日が経過するとは、思っていなかった。

+++

筆者は東工大／東京科学大のスペイン語教員であるが、実は筆者の研究者としての専門は、スペイン語学（言語学）でも、スペイン語圏の文学でもなく、メキシコの政治を研究対象とする政治学、そして同国からアメリカ合衆国（以下米国）への移民の研究であり、私にとって最も重要な研究方法は、現地におけるフィールドワークである²。

筆者は2024年の2月から3月、6月、そして8月と、3度にわたって現地調査を行ったが、本稿ではこれらの、久々に行うことができたフィールドワークについて、なかなか論文には書けない、しかし読者の皆さんにもしかすると関心を持っていただけではないか、という話をしていきたい。2024年について特筆すべき研究対象としては、6月2日に投票が行われた総選挙があげられる。このとき、連邦レベルでは大統領選と議会選が行われたほか、筆者が研究対象とするユカタン州では、州知事選挙をはじめとする地方選挙も同時に投票が行われた。

本稿ではまず前半で、6月2日の投票日の前後、1週間の弾丸調査の際の飛行機のハプニングについてお話する。後半では今年の調査その他の場における、新たな出会いについてお話し、最後に「付録」として、今後私が政治学の研究者として論文に書くべきことを、ごく簡単な形でご紹介して、むすびとしたい。

2024年メキシコ総選挙調査の裏話

ちょうど投票日の日がクォーターの合間と重なったこともあり、第2Qの授業開始までには戻ってこよう、ということで、1週間の日程で弾丸調査を計画した。

ユカタンに行くには、メキシコシティまでの直行便（約14時間）を使って国内線に乗り換えるか、アメリカの航空会社を使って、ハブ空港でメリダ行きに乗り換えるか³、二つの方法があるが、今回私が使ったのは、コロナ前にはなかった、アメリカン航空のダラス経由の便であった。

なぜそのようなことをわざわざ書くかというと、飛行機の予定がなんと当日の朝に変更となったからである（!）。当日の午前6時ごろ、私が自宅で最後の準備をしていると、アメリカン航空からのメールが届き、ダラス空港が天候不良のため東京からの飛行機の到着が遅れ、メリダへの乗り継ぎ便に間に合わないとのこと。

さてどうしたものか、と思っていると、30分ほどして別のメールが届いた。ほぼ同じ時間のロサンゼルス行きが手配できました、というメールで、それ自体はありがたいのだが、なんとロサンゼルスで12時間ほど待機した後、夜行便でマイアミを経由してメリダ行きに乗れ、ということで、到着も予定より1日遅れてしまうことがわかった。正味6日間の調査が1日短くなるのは痛い、文句を言っても仕方がない。それにしても、ロサンゼルスで12時間か、と思って10分後、名案を思いついた。「そうだ、サラさんに連絡しよう!」



LAの友人サラさん（右）と妹のアラセリさん・ユカタンにて

サラさんとは、ロサンゼルスでメキシコ系移民の調査をしている時にいつもお世話になっている方で、ご自身も元々はユカタン出身の移民である。一応研究者としての立場から言えば「インフォーマント」の方、ということになるのだろうが、正直そういう意識は全くなく、本当にありがたい友達、という感じの方である。善は急げとメールをしたところ、「その日は孫の世話があるけど、ちょっと待っててくれれば空港に行くから!」という、涙が出るようなありがたいお返事をいただいた。LA国際空港についてから再度連絡すると、そ

の30分後くらいに実際に迎えに来てくれた。コロナ前以来、約5年ぶりの再会である。そこから空港からそう遠くない、彼女の娘さんの家に連れて行ってもらった。

途中、お昼にとカリフォルニア名物(?)のIn-N-Outバーガーをテイクアウトして一緒に食べ、いろいろとお話をさせてもらって旧交を温め、シャワーを浴びさせてもらって昼寝までさせてもらい、お孫さんたちとも遊ばせてもらって、本当にありがたい半日間であった。なお、お孫さんはもちろん英語も話すが、小さい頃よく面倒を見ていたのが、彼女にとって祖母にあたるサラさんと、もう一人のスペイン語話者のベビーシッターさんだったため、この子の母語はスペイン語よ、と、娘さんが誇らしげに話していたのが印象的だった。

マイアミ経由でも再度5時間近く待たねばならなかったが、マイアミ名物のキューバン・サンドイッチを食べたり⁴、初めてのマイアミ空港内を探検したりして、なんとか時間を潰し、無事にメリダ行きの飛行機に乗ることができた。大変な道のりだったが、ロサンゼルスでの半日間を彼らと一緒に過ごすことができたのは、本当にありがたいことだった(もし空港でずっと過ごさなければならなかったとしたら、どうなっていたらう!)

その後、現地についてからもいろいろとさなるトラブルはあったが、6月2日の投票日の前後に現地で様々な話を聞くことができた。これもひとえに、サラさんご一家のおかげであった。

3つの「出会い」

本稿の後半では、今後の調査につながるかもしれない3つの出会いについて書き留めておきたい。最初の「出会い」は正確には再会というべきで、ユカタンの調査地で、いつもお世話になっている敬愛する友人でありインフォーマントのドン・ネレウ氏の息子さんである。彼はユカタンの小さな村で育ち、その後カンクンに移住した。それ以来ほとんど会うことがなかったが、今回調査で再びネレウ氏を訪ねた時、ちょうど帰省中で久々に話をすることができた。彼はこれまで、世界的リゾートで観光業の盛んなカンクンのホテルのレストランで料理人として働いていたが、将来性を考えて近々ホテルの事務部門に転職する予定とのことだった。

2番目は同じく8月の夏休みに再度、今度は家族も連れて行った調査のできごとである。ふだん私たちは調査をするユカタンとメキシコシティにしか行かないが、今回その中間にある港町、ベラクルスに立ち寄り、30年ぶりに友人に会うという計画を立てた。そのベラクルス滞在の最終日、ビーチが宿の近くにあったので、バスに乗る前にそこで子供を遊ばせようということになった。ひとしきり遊んだ後の帰り際、近くにいたご家族に話しかけられた。「私たちは日本から来ました、皆さんは?」という話になり、彼らは隣のプエブラ州出身だが、今はシカゴに住んでいて、某有名自動車会社⁵に勤めている、という話をしてくれた。

実は声をかけてくれたきっかけは、うちの奥さんが落ちていたゴミを拾ったこと、であった。「自分の会社の工場のすぐ

脇に日系企業のバッテリー工場があって、うちの方はゴミだらけだけど、そっちの工場はすごくきれいなんだよね」とおっしゃっていた。そんなこともあって、彼らが座っていたテントの目の前に陣取っていた、東洋系の我々のことに関心を持ってくれたようだった。電話番号を交換し、実際に帰国後一度連絡をもらったので、もしかすると近い将来、彼らともまた会う機会があるかもしれない。

3番目の出会いは、実はメキシコではなく日本でのことである。9月のある日、前述のサラさんから珍しく電話の着信(メッセージはちょこちょこやりとりしているが)があったので、こちらから連絡をしてみると、「友だちが来週東京にいるから案内してやってほしい」とのことだった。そのご友人はメキシコ南部のチアパス州出身で、現在はロサンゼルスで活躍しているシェフとのことで、お嬢さん二人を連れての来日であった。最初に東京で会った時は「渋谷のスタバ」を目印にしたが、駅周辺だけでも何軒ものスタバがあり、また彼が待っていてくれたところは建物の中の2階だったりして(私は地上階をずっと探していた!)、かなりお待たせしてしまったが、なんとか落ち合えた後は、お蕎麦屋さんにお連れしたりして、とても喜んでいただき、私が住む甲府にも遊びに来てくれた。プロの料理人の彼に喜んでもらえるようなお店に連れて行ったり(実家近くの都内郊外のある駅の近くのなじみのラーメン屋さんに連れて行ったところ、「今までで一番うまい」といってもらったのには、その店の大将も私も大喜びであった)、お嬢さんたちのショッピングのお世話をしたりと、お互いにとっていい経験になったと思う。次に会うのがロサンゼルスになるか、日本になるかはわからないが、再会が本当に楽しみである。



ロサンゼルスから来てくれたシェフ・マルティンさんとお嬢さんたち・ある神社にて

米国のメキシコ系の人たちの社会についてのフィールドワークは、メキシコ政治と並んで私の大事なテーマなので、2番目のエンジニアの方にしても、3番目のシェフの方にしても、もし彼らに再会することがあれば、またいろいろな話を聞けるのではないかと楽しみにしている。

おわりに

ここまで、2024年に筆者が行った調査でのさまざまな出来事を中心に、前半は5月末から6月にかけての弾丸調査でのハプニングについて、後半は調査の中での、そしてメキシコの友人たちとのつながりの中での新たな出会いについて、ご紹介させていただいた。

筆者がメキシコでの現地調査を行なっているのは、もちろん学術的な成果を出すためであるが、調査の中で「ぜひこのことを話したい!」と思うできごとの全てを、論文に書けるわけではない。(むしろ、書けることはごく一部なのかもしれない、というのが、本稿を書き終えての実感である。)その意味で、この「外国語だより」という媒体で、論文に書けない話(必ずしも「苦労話」ではない!)をご紹介することができたことはとてもありがたいことだ、と思っている。

実は今年、自分にとって、そして東工大＝科学大のスペイン語教育にとって、すばらしいできごとがあった。これまで熱心にスペイン語を勉強してくれて、環境・社会理工学院融合理工学系修士1年(所属研究室:野原佳代子教授)の山本怜於さんがメキシコの国費留学の試験を受けて合格し、8月末からメキシコへの留学を決めてくれたのである。山本さんは、ILAホームページの筆者の「インタビュー」からメキシコ留学の制度を知り、応募してくれたそうで、現地にもよくなじんでしっかりと学業と生活を楽しまれていると、噂に聞いている。

これまで教養課程のスペイン語しか担当したことがなく、自分の教え子でスペイン語ができるようになった、という方をほとんど知らない筆者にとって⁶、この上ない喜びである。ここに書いたような調査での様々な話、そしてもちろんスペイン語の授業がきっかけとなって、山本さんにつづいてくれる学生さんが出てくることを、願っている次第である。

付録：2024年メキシコ大統領選挙と ユカタン州知事選挙について

どの程度興味を持ってくださる方がいるかわからないが、研究者としての筆者の調査についても、最後に少し書き添えておきたい。

メキシコでは6月2日に大統領選挙が行われ、与党モレーナ⁷が擁立したクラウディア・シェインバウム候補が、アンドレス＝マヌエル・ロベス＝オブラドル大統領の高い人気もあって、59.76%、ほぼ6割の票を獲得して圧勝した⁸。

メキシコという国において、史上初めての女性大統領が誕生したこと⁹、そして一部の州で麻薬カルテルを中心とした政治暴力の問題があり、多くの政治関係者が殺害されたことは、日本でも大きく報道されたが、筆者が調査しているユカタン州では接戦が予想されていた。

ユカタン州の州知事選挙は、事前の世論調査の結果や、地元の政治を長きにわたって見てきている友人のジャーナリストたちの予想に反して、与党モレーナから出馬した、ワチョ・ディアス＝メナ候補が過半数を獲得して勝利した。なぜそ

のような結果が出たのかという問いに対する現地の方の意見は、学校に通う生徒に対する奨学金や、高齢者への年金といった給付策が功を奏したということ、そしてユカタン州の事情としては、これまでライバル同士だった二つの政党がモレーナに対抗しようと連立を組んだことに対する、両党の旧来の支持者の反発があったから、とのことである¹⁰。

また、今回の調査中、いたるところで「カネ」の話を聞いた。2000年に初めて本格的にメキシコで選挙の調査をした時、いたるところで「買票と強制」の話を聞いた。その後、圧力をかけて投票を強制させるということは減ったようだが、買票については、その後もむしろ一般化してきているように感じられる。このことについて、なるべく早めに論文あるいは学会発表などの形で公表していこうと考えている。



ユカタン州ティクル市の投票所・普段は小学校



ユカタン州ティクル市の投票所・投票を見守る人たち

注

¹ 本稿は、科学研究費基盤研究(C)「メキシコ・ユカタン州の先住民村落社会における政治と移民に関する接合的研究」の成果の一部であり、本稿の元になったメキシコでの現地調査は、同科研の資金によって可能になったことを、謝意と共に記しておく。

² メキシコ、と聞くと意外に思われる方もいらっしゃるかもしれ

ないが、スペイン語はスペイン以外に、というかスペイン以上に、ラテンアメリカの多くの国々で話されており（かつてポルトガルの植民地だったブラジルは、例外的にポルトガル語が公用語である）、メキシコではその中でも一番大きく、唯一人口が一億を超えている国である。

³ メキシコと米国の密接な関係を反映して、米国の大手航空会社の多くは、メキシコシティだけでなくメキシコの主要都市への便を飛ばしている。今回の目的地メリダには、現在アメリカン航空のダラス便とマイアミ便と、ユナイテッド航空（旧コンチネンタル航空）のヒューストン便が就航しているが、大都市のモンテレイやリゾート地のカンクンなどであればその本数はさらに多い。

⁴ マイアミはキューバとの距離が近く（90マイル）、キューバ革命以前から関係が深かったこともあり、同国からの移民そして亡命者が非常に多い土地として知られる。

⁵ プエブラ州は米国に移民を多く送り出していることで知られる州の一つで、特にニューヨーク市は、多くのプエブラ出身者が住んでいることで知られる（Robert Smith, *Mexican New York: Transnational Lives of New Immigrants*, University of California Press, 2005.）。

⁶ もちろん、現在アジア経済研究所で研究員をされている三浦航太さん、そして津田塾大学に在籍しながら筆者の他大学での授業を聴講して下さり、その後同大学の交換留学の制度を使って、メキシコメトロポリタン自治大学に留学された新村歩美さんをはじめとして、片手で数えられるくらいは今もお仕事でスペイン語を使っている方を存じ上げているが、東工大・科学大出身者では、山本さんがはじめてである。

⁷ MORENA という 党 名 は、元々 MOvimiento REgeneración NAcional つまり、国民再生運動（英語では National Regeneration Movement）の略で、スペイン語で「褐色の肌の女性」を表す言葉でもあるが、正式名称はあくまで MORENA である。本稿でもそれに従い、片仮名で「モレーナ」と表記する。なお、モレーナは元々、ロペス＝オブラドールが2012年の大統領選挙に敗れた後、2018年の次の大統領選挙に向けて選挙活動を継続するために作られた組織であったが、2014年に彼が所属していた民主革命党（PRD）内での内紛があり、ロペス＝オブラドールが離党したのに伴って、政党になった。（馬場香織「メキシコの正統システム変容を考えるー新興デモクラシー諸国の変貌」『年報政治学会』2012（2），104-136.）

⁸ 59.76%で圧勝とは大げさと思われるかもしれないが、2位に終わった候補の得票が27.45%にとどまったこと、そ

して、2000年以降の大統領選挙の勝者の得票率が、42.52%（2000）、35.89%（2006）、38.21%（2012）、53.19%（2018）であり、50%を超えた候補は、前回勝利したロペス＝オブラドール候補のみであることを考えると、それをさらに上回るシェインバウム候補の得票率が、近年のメキシコの大統領選の基準から見ても高かったかがよくわかる。

⁹ 今回次点となったもう一人の有力候補のソチトル・ガルベス氏（Xochitl Gálvez：ファーストネームのソチトルはナワトル語で「花」を意味する）も女性であり、女性大統領の誕生は選挙戦が始まった時点で実質的に決まっていた。なお、大統領となったのはシェインバウムが初めてであるが、彼女の前職のメキシコシティの知事となったのは彼女が初めてではなく、他にも主要政党の女性党首や州知事などについて有力な女性政治家は、筆者も以前インタビューをさせていただいた、ユカタン出身国会議員、ドウルセ＝マリーア・サウリ氏をはじめ、多くいることを、念の為申し添えておく。

¹⁰ この意見を私に話してくれたのは、後半で息子さんのことを紹介したドン・ネレウである。彼自身も元々は PAN という政党の活動家だったが、最近は一市民として状況を冷静に分析しつつ、必ずしも自分のもつた政党にこだわらず、自分がいいと思った候補を応援している、というように私には思えた。なお、彼のご家族については、以下の論考で少し紹介しているので、よかったらご一読いただきたい。（渡辺暁「マヤとサポテコのロサンゼルスーカリフォルニアに住むメキシコ先住民の世界」『ワセダアジアレビュー』20, 40-47, 2018. ちなみに筆者がこれまで書いてきた論考の多くは、こちらのサイトから読むことができるので、ご関心のある方はぜひご覧ください：https://researchmap.jp/akira_watanabe）

カルラ・トロヌ＝モンタネー先生 自己紹介 / Self-Introduction by Prof. Carla TRONU MONTANÉ

Foreign Languages Section, Institute of Liberal Arts

Associate Professor Carla TRONU MONTANÉ

スペイン語教員のCarla TRONU MONTANÉ（カルラ・トロヌ＝モンタネー）と申します。苗字は二つです。スペインやポルトガル、ラテンアメリカでは、お父さんとお母さんの苗字を両方とも名乗ります。私はバルセロナ出身で、カタルーニャ語とスペイン語のバイリンガルです。小学生の頃からフランス語と英語を、大学生になってからは、ドイツ語と日本語を勉強しました。異文化コミュニケーションと外国語に興味があり、リベラルアーツ研究教育院の外国語セクションで働けることを光栄に思っています。2024年4月に東京工業大学に着任した半年後に、東京医科歯科大学と合併しましたが、東工大のルールに慣れる前に、さらに変更があり、翻弄されています。慣れないことばかりで至らないことが多々ありますが、スタッフや教員の手厚いサポートのおかげで、なんとか業務を遂行できており、皆様に感謝いたします。

着任前は、ロンドン大学、マドリード自治大学、関西外国語大学で、日本史や日本宗教、スペインと日本の文化交流、スペイン文化、スペイン語の教育に従事してきました。現在は第二外国語科目としてのスペイン語授業に加え、文系教養科目、学部生の「外国語への招待」や大学院の「越境型教養科目」を担当しています。スペイン語の授業は、言語だけではなく、異文化リテラシーも身につける機会であると思っています。リベラルアーツ研究教育院では、ドイツやイギリス、日本での留学やポストドクの経験を踏まえて、現代社会の重要な特徴である多様性や多文化性、異文化交流に役立つ授業をしたいと考えています。

専門は戦国時代と近世をまたぐ「キリシタン時代」における日本とヨーロッパの初めての出会い、特にポルトガルとスペインが支援したキリスト教の宣教活動を宗教学・歴史学・文学の多面的な観点から研究を行っています。具体的には、ポルトガルとの貿易のための港として、そしてキリシタン町として誕生した長崎の「聖なる場」の変容について、イエズス会が日本に持ってきた印刷技術で日本語やラテン語、ポルトガル語で出版された「キリシタン版」について、そして近代・現在の日本の「殉教者」について研究してきました。現在の研究プロジェクトは、在家信徒組織である「兄弟会」の活動と宣教修道院（イエズス会と托鉢修道会）の対立についてです。

このたび、10年間暮らした関西を離れて、初めて関東に住むことになり、新しい世界が目の前に広がっています。毎日新しい環境から刺激が多く、新鮮な気持ちです。無意識に関西弁が出てくる時や、カタルーニャ語文学がご専門

の先生と母国語のカタルーニャ語で話す時、みなさんはびっくりすると思います。私の多様なアイデンティティーを活かすことができ、かつそれを認めてくださるのは、とても嬉しく、感謝の気持ちでいっぱいです。今年度も、ポスト・コロナの中にあり、オンライン会議が中心で、まだお会いしていないリベラルのスタッフや教員がたくさんいらっしゃいますが、これからの出会いを楽しみにしています。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。



My name is Carla TRONU MONTANÉ, and I am a new Spanish teacher at the Foreign Languages Section. I have two surnames, because in Spain, Portugal and Latin America the rule is to use both the father's and mother's surnames. I am a Catalan-Spanish bilingual, born and raised in Barcelona. I studied French and English since elementary school, and German and Japanese when I became a university student. I am interested in foreign languages and intercultural communication, so I feel at home in the multilingual environment of the Foreign Language Section.

I was appointed to the Tokyo Institute of Technology in April 2024 and six months later we merged with the Medical and Dental University, so in the blink of an eye, the business cards that I received in April were history. Before I could get used to the rules, I was facing new changes, but thanks to the generous support of the staff and faculty, I have been able to carry out my duties. I would like to express my gratitude to all who have helped me.

Before taking up this post, I taught Japanese history, Japanese religion, multiculturalism and Spanish culture and language at several universities, including the University of London, the Autonomous University of Madrid, Doshisha University, and

Kansai Gaidai University. Currently, in addition to teaching Spanish as a second foreign language, I collaborate in two liberal arts courses: 'Invitation to Foreign Languages' for undergraduates, and 'Cross-border liberal arts course' for graduate students. I believe that Spanish courses (and any foreign language courses), are an opportunity to acquire intercultural literacy and communication skills. I hope that my classes at the Institute of Liberal Arts are useful for students to develop their skills to navigate diversity, multiculturalism, and intercultural exchange, which are crucial in today's global society.

My research focuses in the first encounter between Japan and Europe in the early modern period, from a multidisciplinary point of view including religious studies, history, and literature. More specifically, my research topic is the early modern Catholic mission in Japan under the patronage of Portugal and Spain. I have explored the transformation of the 'sacred space' in Nagasaki port city (which was born as a Portuguese trading port and 'Christian town'), the publications in Japanese, Latin, and Portuguese by the Jesuit Printing Press in Japan called *Kirishitanban*, and the canonization processes of the early modern 'martyrs' of Japan. My current research project is on lay confraternities and the missionary rivalry between the Jesuits and the mendicant orders active in Japan.

After living in the Kansai area for 10 years, I have recently moved to the Kanto region for the first time, and a new world is opening before my eyes with new landscapes, new tastes, and new intonations. When I unconsciously use the Kansai dialect, or when I speak Catalan with a part-time lecturer specialist in Catalan literature, I think everyone is surprised, but I am very happy and grateful to be able to keep the diversity of my identity alive. This year, since we are still in the post-COVID period, meetings are mostly via Zoom and there are many colleagues and staff that I have not been able to meet yet, so I am looking forward to making new acquaintances in the future.

東京科学大学リベラルアーツ研究教育院 外国語セクション

外国語だより Vol. 9

VOICES FROM THE FOREIGN LANGUAGES SECTION, INSTITUTE FOR LIBERAL ARTS, Vol. 9

発行日 令和 7 年 3 月 1 日

発行所 〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1
東京科学大学リベラルアーツ研究教育院 外国語セクション
TEL 03-5734-2287 FAX 03-5734-2938

発行者 室田 真男

編集者 田村 斉敏・楊 冠穹

印刷所 株式会社鮮明堂